

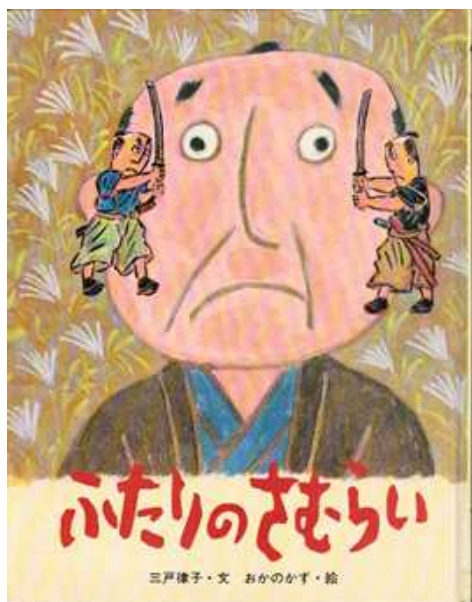
郷土文化財紹介

伝説と昔話シリーズ

＜坂下の昔話＞

《二人のさむらい》

今から 50 年ほど前、坂下中学校に文芸部という活動がありました。三戸律子先生が中学生と握地域の古老のお宅を訪問して、語り継がれた昔話をテープに聞き取り、絵本にされました。また、大橋和華先生と一緒に収集された「恵那昔話集」にも掲載されて、他に沢山の昔話があります。その中から「ふたりのさむらい」「勝負が池のがいこつ」の題名で書かれているものを取り上げてみました。次のお話は、握の林彦太郎さんから聞かれたものです。



←「日本のみんなえほん」の表紙

それは、『その昔、この辺りで一番高い高峯山の頂上に氷餅屋(こおりもちや)があって、苗木の赤壁城の殿様が戦いの折の食料にしていました。二人の侍は殿様の命令で氷餅を買いに高峰山に来て、道々話をしました。ささいな話から口争いになり、とうとう刀を抜きあって果たし合いをすることになってしまいました。握の権吉さんは苗木の城下町で用を足し勝負が池に来たとき、この二人の侍に出くわして立会人を無理矢理押しつけられてしまいました。「お

たちい」で侍二人は刀を振り上げてにらみ合ったが、むんずとも動かん。「おひきい」の掛け声で刀を下ろし肩で荒い息をする。なんと繰り返しても肩で息をして動かん。

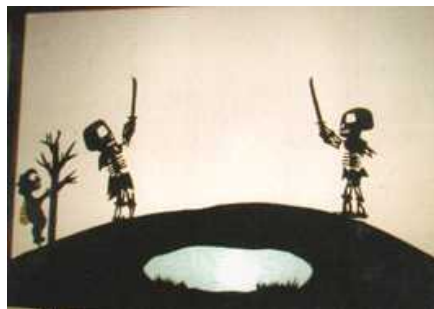


←坂下かげえさあくるが制作した影絵冒頭

→「おたちい」「おひきい」の場面



そのうち権吉さんは小便をもよおし、二人がにらみ合っている間に少しずつ後ろへ退いて、身を隠したところでブルブルっと身震いし怖くなって家へ逃げ帰ってしまいました。秋も過ぎ冬が来て高峰山が雪化粧したころ、権吉さんは高峰山の向こうの親類に用ができて勝負が池の側まで来ると、二人の侍は刀を振り上げて骸骨となりにならみ合ったまま立っていました。権吉さんが思わず「おひきい」の掛け声を発すると骸骨はガラガラッと崩れ落ちました。いつしか、その上に土が積もり二つの土盛りとなり、そこに二つの祠が作られました。』と言う話です。



←骸骨となってもにらみ合う二人の侍、この後、「おひきい」の掛け声でガラガラと崩れた。

1996 年「日本のみんなえほん 5 ふたりのさむらい」(文・三戸律子 絵・おのかず)として発行されました。この結びの

文に三戸先生は『「ふたりのさむらい」についてと題して、「二人の侍が道々でどんな話をしたのかは知るよしもありますが、ささいな口争いから、とうとう刀を抜きあって果たし合いをすることになってしまいました。立会人を頼まれた権吉は、怖くなって途中で逃げ帰ってしまいますが、きっと（若い命を二人ながら落とさなならんとは、武士とはなんたら不都合なもんじゃ）とあきれ返ったことでしょう。このごろは高峰山も開発会社が入り、高峰分譲地として売り出され自動車道路が造られ、赤い屋根、青い屋根の別荘が建ち始めました。道路から十メートルほど入るとわずかな窪地があります。ここが勝負が池の跡地です。この地の持ち主であり、お話をしてくださ

った握の林彦太郎さんは、（高峰山が別荘地にかわっても、この勝負が池だけは残しておきたいと思ってなも）と言われました。そんな強い思いに使命感をかき立てられえほんにしました。』と述べてみえます。

「坂下かげえさあくる」では、このお話をカラーの創作影絵とし坂下保育園児らに上演されました。美しい影絵ですが怖い話でした。かつて保育園に勤められた鎌田先生からその影絵の写真をご提供いただきました。

《濃が池その1》

坂下の字の1つに「濃が池」という湿地があります。原台地を栴の湖から乙姫橋に走る道路の中ほど(中原)でしょうか。この何十年かの間に濃が池の周辺は眺めがずいぶんと変わってきましたが、何とかして伝承して行けたらと思います。「濃(のう)」は誰も見たことの無いとてつもなく大きな怪物のことで。この怪物が残した足跡を「濃が池」と伝えてきました。



←雨上がりに水たまりのできた濃が池の湿地。
写真中央の下方部。

「ふるさと坂下」（鎌田宮雄著）によれば、湿地なので多くの植物が生え豊かな植生をあらわし、また子供たちの遊び場であったと記します。古老らから聞き取られた「濃」についての話は、『数年日照りが続き坂下や山口は大干ばつに見まわれ、木曽川も水が涸れようとしていた。とつぜん一面の黒雲が坂下、山口を覆い、それをかき分けてのうが天から下りてきた。「濃」は木曽川をまたいで右足を坂下の中原に左足を山口に下ろし、木曽川にしゃがみ込んで水を飲みほした。村人たちは驚き困った顔で見ているばかりだった。「濃」が天に帰り数日すると、困った村人の気持ちが通じたのか坂下や山口に恵みの雨がどっと降った。「濃」の足跡にも水がたまり、いつしか濃が池と呼ばれるようになった。』と記されます。



←「ノウのいたずら」だし部分の絵。水が干上がり、水を求めてさまよう動物ら。

このような話に手を加えられたもので、「ノウのいたずら」(三戸律子、え・堀井昭美)と題する話が子供向けの「コボたち」(岐阜児童文学研究会編)の中に収められています。その出だしと、さし絵を紹介します。

むかしむかし、うんとむかし。恵那坂下の山おくに、大きな大きなノウという怪物がすんでおった。

ある年のこと。雨がやっとうふらんで、木という木、草という草はみんなしおっとなだれてしまった。

川という川は、みんなひあがってしまって、ちょろちょろとしかながれんもんで、魚は白いはらを出して、いまにも死にそうであった。

生きものという生きものは、水がほしくて、すこしでも水たまりがないもんかと、わいわいがやがや、あちらをさがし、こちらをさがししておった。

さすがのノウも、のどがかわいたもんで、どこぞに水はないかと、のっしのっしとあるきまわっておった。水たまりなぞちょぼりともみつからん。とうとう木曽川のあたりまでおりてきた。と、どうだ。さすがは木曽川。うつくしい水がとうとうとながれておるではないか。

「たすかった、こいでひといきつけるわい。」

ノウは、ほっとすると、左足をどっこいしょと、川のむこうぎしに、もうかたいっぽうの右足は、うんとこしょと川のこちらがわにおいて、りょう手で木曽川をせきと

めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・



←木曽川の水をたっぷりと飲み、天に向かってその水を噴きだし雲を呼び雨を降らす怪物ノウのさし絵。

残念ながら全文の紹介はできないので、上記の絵本を読まれることをお勧めします。

このような雨乞い(あまごい)の話は全国に幾つもあります。坂下では木曽川川縁に雨乞い大岩があります。ここで水(川)の神様にお供えをし雨が降るよう願ったのでしょう。

*文中「・・・・・・・・」は以下割愛部分。

《濃が池その2》

昔は災害が起これば神に祈ってきました。「風雨順時 五穀豊穰」という祈願文があります。頼るところは神様しかなく、芸能などを奉納して真剣にお祈りをしていました。「人身御供(ひとみごくう)」という言葉がありますが、最後は人身をお供えし希

望が叶うようお願いをすることもありました。そんな濃が池の話もあるので紹介します。

「続・美濃と飛騨のむかし話」(岐阜県小中学校長会編)の第四部冒頭に「のうが池」(野田満 さしえ・山田輝夫)があります。その一部を紹介します。坂下公民館

図書室に書籍があるので読まれるのを期待しています。

この坂下の町も、むかしはススキの草原で、カヤぶきの家が、あっちにぼつり、こっちにぼつりの、それはさびしい村であった。その年はとくに天気ぐあいが悪くて、毎日毎日、やりのような雨がふり続いた。

村はもう大さわぎで、おとなはみんな、みのかさをつけ、くわをかついで、一本スギの丘に集まる。

「ことしも『のう』があばれだしたぞよ。」

「こりゃ、もう手もつからん。」
みんな、……、しんぱいそうにみつめるばかりだ。



←大雨、長雨を降らせ、農民たちを困らせる怪物ノウのさし絵。

ここで、「ミヤ」という5才ぐらいの女の子とその母が登場し、母が大雨を降らせている怪物のうについて怖い昔話を聞かせます。大雨が降り続いた時に、村ではミヤと同じ年頃の女の子をのうに差し出し大雨

が降り続けるのを止めてきたこと、最後の女の子は自分からのうのところへ行ったが、不思議なことにのうと話をしして帰ってきたことなどです。



←母がミヤに語り聞かせるさし絵。

ひるすぎになってもおとなたちは、一本スギの下で、雨だれに顔をしかめながら、なんだかんだとさわいでいた。

そのころ、ミヤは、母のとめるも聞かないで、坂下の野っばらに出かけた。『のう』に会って「もうええかげんに、あばれるのをやめてくろ。」とたのむつもりだ。

(ミヤは)坂下の村の、ど真ん中に出た。そのとき、『のう』も、ちょうど坂下のまん中あたりへ、黒雲に乗って出てきた。

→怪物『のう』にしんけんに話しかける「ミヤ」。そのけなげさに感動した『のう』のさし絵。



(何年か前に約束した)女の子と、そっく
りのそのまま・・・・・・・・・・
目をくろぐろとかがやかせ、・・・・・・・・、
命でもかけたようなしんけんな顔で歩いて
いる。・・・・・・・・・・

「や、や、女の子は、いいかげんにあばれ
るのをやめんかと、えらくえらくおこって
いるぞ。」・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・ けなげな女の子をおこらせ
たくなかった。」

『のう』はよこしょと、中原にふんばって
いた右足をあげ、なにかひと声さけんだか
と思うと、北の空へかけ去っていった。

《大巻と猿鼻》

「大巻」と「猿鼻」という字名が坂下の
東町内と木曽川を挟んで賤母地内にある。
ここは、田立方面から直進してくる木曽川
の流れが、阿寺断層活動で300度ぐらい
向きを変えたところである。坂下側は大き
な岩の塊が木曽川を取り巻き、対岸の猿鼻
は大きな砂場となっている。そんなところ
に昔話が生まれてきたのであろう。



↑写真奥へ向かって流れる木曽川の右側は大岩
が連なって露出している。左側は白砂が堆積
した砂場である。

恵那地方の昔ばなしを集め編集した「恵
那昔話集」(大橋和華編)があります。残
念ながら今は絶版となっていました
が、その中から坂下の古老等が語った昔ば
なしを抜き出して紹介します。一種のおも
しろばなしです。楽しんでください。書籍
は三戸様よりお借りしました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
雨はやみ、やっとかめに日がさしてきて、
まずミヤの後ろのススキに照った。

この後、叫び声から『黍生(きびう)』と
いう字名が出来たとし、揖斐の山国にも『鬼
姫生(きびう)』という字名があり『のえ』
という怪物がいたと紹介されています。

【猿と川獺(サルとカワウソ)】

(握・林彦太郎・明治32年生)

昔、猿と川獺がおって、猿の奴はこすう
て、川獺は気のいいやつちゃもんで、猿に
やられても、そう仕返しもせずにおるわけ
やなあ。そうすると、ある時、川獺がうま
そうに串刺しにしたウグイを焼いちゃあ食
つとる。猿がそれを見て、「おれにも一匹
それをくれんかや」ちゅうと、「お前なん
かにやあ、やってもいいけど、もう一匹し
かないで、ウグイを捕ることを教えてやる。
方法を教えてやりやあ、お前のような立派
な尾っぽがありやあいくらでも捕れる。
そうやれよ」ちって言うで、「どういう風
にやるだ」ちゅうと、「寒い晩になあ、川
へ行って尾尻を水の中につけておると魚
が来てくいつく。そうやって獲る方がいい
ぞ」ちって。

ほうして猿は教わった通りに試そうちゅ
うわけで、夜中に教わった瀬に行つてしゃ
がんどったちゅうわけだわなあ。しゃがん
でおつたら、やっぱり凍みてくると水が凍
みついてきて、氷が付くわけだわのう。猿
が川獺にかたき討ちされたなんちゅうこた
あ知らずに、「もう食いついたで、こりゃ
あ尻尾をふつてもなかなかとれんぞ」ち
ゅうわけでやっとなるうちにのう、とうとう
こねついちまって、ぐーんと引っぱるうち
に尻尾がぷつーんと切れてのう、朝日が

さ
差しかけたら、とけた尾っぽがぐるぐるぐ
るぐる水にうずまいとったって。そこが
おおまき
大巻ちゅうとこだって。昔は「尾巻」ちっ
とたが「大巻」になったって。そいで「猿鼻」
さるはな
ちゅうところがそのあいむかいにある
が、そこは猿が鼻ついたとこだちゅうが。

.....

.....



↑ 写真は大巻の「もんぺ岩」。昔は子供ら
がこの大岩から飛び込んで楽しんだと聞く。

【流れぬ質草(しちぐさ) 大巻のもんぺ岩】

(新田・原吉六・明治38年生)

もんぺえ
昔、紋兵衛という人があって、着物やい
ろいろをしょちゅう質に入れよういでた
げなが、いつも流れちゃうで、質屋が、「ち
しちや
いと流れんもんを入れんさい」ちったげな
ら、「ほんなら大巻に大きい岩があるで、
こいつなら流れんで、こいつを質に入れる」
ちって、質に入れたげな。それがもんぺ岩
ちゅう岩で、そいで今でも流れとらん。

.....

.....

木曽川に関わる昔話は、他にもあります。
「黄金の瀬」は、川の瀬が夕日に映える様
か。「乙姫岩」は、木曽川が蛇行し深く緩
やかな淵の中に突きだした岩塊で樹木が茂
りその風情をかもしています。

天災や人災で風景は大きく変わってきま
した。このような昔話が無くなって行くよ
うに感じられます。